

言語教育—就学以前に蓄積できるもの

— 試行 I —

上 野 め ぐ み

はじめに

平成17年度紀要に、言語教育の先にあるものと題し拙い教育論を自分なりに再考した。

こころの豊かさを育むためにという大きな括りで言語教育を考える機会を改めて得て痛感したことは、教育に関わる私たちに問われる、時代との、或いは、教育を受ける側との間を埋めるべき、たゆまぬ努力と知識の必要性であった。教育に関わるものは、常に変化する大きな時代の流れを常に知り、学習者を可能な限り知らなければならないという、全くの原点を衝かれる結果となった。学習者を知るという意味においては、自らの子供やその周囲の環境に映し、分かったつもりで言動していたことは、今年度、幼稚園に英語講師として1週間に1度、1日園児と共に英語活動に限定することなく、保育者の園児や保護者、また、保育者間にかわされる様々な言動を垣間見る機会を得、自らの多くの修正すべき事柄を発見するに至った。

今回は、保育者と英語講師の Team-teaching の再考・保育活動と英語活動の関連性に重きを置き、考え、今後の幼稚園内における英語活動を再考し、カリキュラムの再編をめざす報告書の形を取りたいと思う。

第1：学習環境

2005年度より英語講師は、幼稚園の先生方との話し合いで毎週月曜日は、保育者と同じ様に、園児の登園時間以前に園舎に入り、また降園まで幼稚園児と時間を共にできる機会を得ることになった。1週間に1度とはいえ、園児の1日の流れ、保育者の1日の流れ、更には、保護者との直接的なコミュニケーションを取る、英語に対する保護者の思いを垣間見、知ることでできる大きな機会になったように感じる。さて、文京学院大学付属幼稚園の英語教育の歴史は長く、先に、平成9年の人間学部紀要一創刊号には、本学教授アレン玉井光江氏（1994年4月より本園の英語を担当され、現在の園における英語活動の CORE の部分を作られた）と幼稚園の共著—文京幼稚園における英語教育の変遷と試み・より良い英語教育に向けての取り組み等を参照いただければ、その内容が詳細にお分かりいただけると思う。外国語教育の意義と実情、園における英語教育の変遷、英語教育の方法と実践、より良い英語教育への探究などあらゆる角度から報告されている。

言語、ほとんどの園児にとって母国語である日本語のみならず、環境と条件によっては、他

言語も、言語能力が最も発達するとされる就学前の学習者である、幼稚園児はかなりの個体差は認められるが、順調な学習習得対象者となる。現に子供たちは、日常の中で言葉による様々な遊びを通し、また体験を通し、言葉を体得していく。

年齢、発達、興味を考慮した英語活動、Team-teaching の形態、保護者・保育者と環境を念頭に再考を重ねていきたいと思う。

文教地区とされる地域性に加え、昭和29年に開園、昭和43年には、本学園創立者島田依史子先生が幼稚園での英語教育導入を勧められたと聞いている。

学習環境として特筆すべきは、その歴史の長さも勿論であるが、やはり、近年、保育者自身が自らの保育活動に英語を積極的に取り入れている姿勢であろう。これは、前述の紀要にも書かれていることだが、保育者の英語活動に対する意識の向上を見事に目に見える形にした、アレン玉井光江教授の指導下に積み重ねられた保育者の研修一子供が習得していく英単語・歌、子供が英語活動で実際耳にする Classroom English、発音を中心とした英語力の引き上げ〈紀要参照〉が継続的に行われていたことの成果であろうし、また、現保育者の英語に対する意識的・無意識下の努力によって築かれてきているものであることは明白である。永年にわたり英語が保育の中で突出した存在にならないように保育に連動した英語教育を求めて歩み続けた道の延長上にある幼稚園の英語活動の一端をまずは、紹介したいと思う。例を挙げることにしよう。

年間のほとんどの英語活動は、年長クラス週1度20分（活動内容・保育内容によっては変動あり、また、合同クラスで時間・内容の変更あり）・あお・みどり2クラス〈クラスの英語活動の順番は毎週交代〉クラス①9：40—10：00 クラス②10：05—10：25の形に決められ、年中クラス・きりん・ひつじ2クラスは週1度15分でやはり、クラス順は隔週交代、年長の英語活動後に行われている。また、年少クラス・りす・うさぎ・こたりの3クラスにも、平成10年度10月より年2回、11年度4回、12年度からは、2学期より開始、8回の英語活動を導入してきている。園児の Attention-span を考慮し、導入当初の活動時間より短縮されていることは前紀要にも書かれていることではあるが、自身、英語活動時間のみ園内にいた時期に比較し、レッスン実質時間そのものに加え、園内、園庭で共有できる時間空間自体が、プラス要素になっているように感じる。活動保育内容、時間共に英語教師が園内に一日いられる環境になったことで、活動に幅や柔軟性、更には、保育者の通常の保育内容、信条など英語教師側が得られる必要な情報量は、かなりの違いであると思う。さて、保育者は具体的に英語活動をどの様に導入しているのだろうか？ 年間を通し、みくるルームという多目的教室を英語活動の場所にしてはいるのだが、各保育室で活動することも多く、保育室の特性を生かせる、つまり、園児の日常生活の基盤となるロケーションが活動の場になる利点を最近は大いに認めざるをえない。

みくるルームに英語活動にやってくる園児たちは各保育室のある2階から1階へと全員で一斉に旅をしてくる、旅の途中にはちょっとしたアクシデントも起きよう。何事もなく無事に英語活動に進めることもあるが、気持ちの切り替えができぬまま活動に入らざるをえないことも

あろうから開始時のコンディションは大きな要素といえる。勿論、みくるルームという切り替えのできる場所は、英語活動に向かう気持ちを備えて生活グループ等に分かれて着席し活動に入る効果が期待できる。しかし、保育室外にスタンバイし英語活動以前の様子を窺い知れる環境にいて、その後に英語講師が、Hello! と挨拶をしながら入室し活動に入っていく形の利点も否定できない。英語講師が、言い方は少し奇異だが、子供たちの領域にお邪魔する形の方が最近では、自然に感じるようになっている。また、園内外、保育室、なかよしコーナーと名付けられた両クラス共有の場、階段、昇降口、庭、職員室など、幼稚園という環境全てでの園児との接点が、活動内容の参考となってこよう。

さて、本園では、前述の通り年間年長2クラスが各20分31—32回、年中2クラスが各15分31—32回、そして年少の3クラス各10分8回の英語活動を導入している。その各英語活動は、ほとんどが、午前中に行われているのだが、行事に合わせて昼食後、降園直前に行われることもあり、いかに自然に園児に対し英語活動を促していくのか、何回かかなり前から保育室近くにスタンバイし様子を観察してみた。ここからは、その様子の描写を試みよう。午後に活動を組み入れた年長クラス①は、降園の支度がある程度整えている。それぞれ園児は自分のペースでおしゃべりをしながらバラバラに用意されたマットに座り始める。保育者は、園児の様子を確認しながら、ピアノで既習の英語の歌を弾き始める。ピアノの音色が聞こえ始めると、かなりのスピードでざわめきが低くなり、数名の園児が歌い始めると、残る園児も一斉に英語の歌を歌い始める。ほとんど全員が着席し、英語の歌を歌うことに集中してきている様子が窺える。何人かの園児が遅れを取っている様子で、保育者は〈○○ちゃん頑張ってるね〉、〈急ごうね〉等の促しの言葉をかけ、学年付きの先生がサポートをしている様子。1回目の歌が終了間近になると、ピアノ伴奏のスピードをゆっくりに変える。園児たちが少し遅れを取ってしまっている園児に声掛けをし、全員が着席をしたところで、もう一度、〈今度はきれいな声で!〉〈優しい声で!〉と声掛けをし、歌って活動が始まる心の準備を促す。Team-teachingでホワイトボードの前に立ち、英語活動をナビゲイトする担任、或いは学年付きの先生が講師の名前をMrs.○○の形で呼ぶように園児に促し、講師の名前が呼ばれる。講師は挨拶をしながら入室、〈You sang ○○ song very well, didn't you?〉など声掛けをしながら活動に入っていく。園児は〈えー、聞いてたの?〉などと反応は様々だが、すぐさま、ルーティンとなっている greeting に入る。

これは、ほんの一例である。

保育者による英語講師が活動に入る前の学習環境作り。これは、保育者が学習者である園児たちの言動の形態を熟知しているからできることであろう。保育者は、ほとんど無意識でこの学習環境を作ることに動いているように見受けられるが、これは、実に前任の英語教師が長い年月を費やし、保育者を Team-teaching-partner として自らの努力と研究心によって、話し合いを重ねてきたことによるものと思われる。自ら学習環境設定に協力すべくパートナーを育成してきた功績は大きい。

第2：学習形態

Slow-learning・Pleasure-learning

知的好奇心が満たされるとは：

好奇心のかたまりともいえるこの年齢における、言語活動の意義、動機付け、就学以前、つまり、この時期に（3歳から6歳期に）必要な要素というのは、言語活動という範囲を超えたある意味普遍的要素を問われるように思う。生涯教育が学園のCOREである。個々人によって学習時期に適宜性があると仮定すると、個々人が選択肢として持つ最高の環境作りに努めることが重要だと思われる。選択能力が、まだ未発達の時期こそ当然重要なかもしれない。言葉とは、運用する必然性と機会がなければ習得されにくいという、原則に立ち返る。また、学習者に適する学習形態を生み出す。また、学習形態に何らかの一貫性を持たせることも重要であろう。学習者の知的好奇心を満たす学習内容とは、やはり学習者の成育の原点ともいえる骨組みに則って構成される幼稚園保育と連動させることが最重点といえるであろう。年少クラスの保育者によれば、年少の年齢に合致したペースで保育が展開され、優先順位を決め、必要最小限の活動に限定、時間的にも空間的にも余裕を持たせることを心がける、それでも現実には、追われる感があるという。保育者にそうした意識があるかなしかで保育内容の量も質も変化することはいうまでもないであろう。さて、学習形態にも同様の感がある。活動時間の限定によって、経験からどうしても盛り沢山になる傾向になりがちだが、現在は、英語活動以外に園児との接点を持つ余裕を若干ながら得たことが、必要最低限の活動によって、園児自身の好奇心による自主性の育成が可能であるかもしれないという感触を持てるようになってきている。この自主性とは、学習ターゲットとなる対象に対する〈もっと知りたい、もっと話したい、もっともっと〉という気持ち、意欲の育成を意味する。学習者の年齢にかかわらず学習への動機付け、興味の延長上にある努力、更には達成感には大きく意味を見出せよう。

Slow-learningとは、活動内容を保育と連動させ絞り込むことで、テーマに沿う内容を丁寧に年齢に合わせた速度と定着の程度を推し量った繰り返しの活動を展開する形態である。もちろん、学習原則に則った要素を今更、という感もあるが、原則に立ち返ることを常に意識下に保育者が持って、連日ケーススタディの形で意見の交換をする保育者の日常を垣間見るチャンスを得たことで、再度、言語講師側にもそれが強く要求されていると感じている。園児たちの環境が目まぐるしく変化している時代にあって、現象としては、年齢に合わせ、活動内容の変化を求められていることは実感するが、例を挙げるなら、年長クラスでは、挨拶、クイズ、ゲーム、歌、絵本、ルーティン化している活動以外は、2、3度目にした対象物に対し〈またー？ 違うのがいいー…〉などの声が聞かれる。しかしながら、少しでも、変化を持って展開させることで、表情は一変し、興味を持って活動に参加してくる。まさしく、講師・保育者側の言葉掛け・展開の仕方に左右されることは明白である。期間でいえば、1ヶ月ないし2ヶ月、或いは、ひと季節、一活動、一行事など余裕を持った活動を心がけ、またカリキュラムの骨格を保育者と検討しながら、柔軟性を持って活動に当たる。つまり、その時々に必要な要素を加

えられる時間的余裕を意識して持つ。カリキュラム先行にならない、活動内容の吟味と選択が最重要事項となってくる。

当然、言語講師は各クラスの年間カリキュラム、週間カリキュラム、また、英語活動日の保育内容を幼稚園に問い合わせ、講師側の英語活動のカリキュラム提示後、修正を随時図っていくことがかなり、全てを補う要素となっている。特に、英語活動日当日の朝のミーティング、或いは適宜に行われるミーティングに参加させていただくことでかなりの必要と思われる情報を得ることができ、保育の流れ、各年齢、クラスの特徴、或いは、保育者の教育信条を垣間見るチャンスをも得られる。登園以前から降園後の課外活動までを知ることで保護者との接点もコンスタントに取れてくる。つまり、学習者を知るということは、学習者との接点を多く持つだけでなく、人間環境を含めてのできる限りの全てを垣間見るチャンスを多く持つことから始まるという原点に立ち返ったわけである。

○歳児といっても月齢によって大きく個体差のある時期の活動は、特に大きな集団で活動が行われる場合、少人数で行われる場合、個々人で行われる場合では、大きく違いが出るのは当然のことであろう。園児の声を拾い、反応を吟味する。個別に反応が不可能であっても、目を配り、心を配ることによって得られる情報の意味を感じるこの頃である。自らの育児体験を生かしたり、反省させられたり、個人的な視点からも得る事柄の多さに気付かされてきている。小学校への英語活動の導入、その後の英語教育への連携など、就学以前の言語活動の意義とその役割の重要性はいうまでもない。しかしながら、必要なものを必要最低限という大原則の上限定された内容を様々な関連を持たせつつ、丁寧に、ゆっくりという意識を常に持つことは、現場を垣間見、園の保育に連動させることで実感した英語活動の骨組みといえようか？

Pleasure-learning：園児の興味は身近な環境にある。幼稚園教育要綱にもあるように、幼稚園教育基本は環境を通して行う教育である。幼児期にふさわしい生活の展開、遊びを通しての総合的な指導、一人一人の発達の特性に応じた指導と基本を準え、計画的な環境の構成を再考し、幼稚園教育の目標を念頭に置くことはいうまでもないが、英語を通し、園児が自らの気付きによっていつしか自然環境、人間環境を整えるための基盤を作る何かを盛り込めないだろうか？

遊びからの発見、つまり、英語活動であっても、ルールを守ることの重要性など、言語教育一般に共通する言葉の持つ意味、意義を体験する要素、楽しいという気持ちを園児どうしが育む、共有する要素を活動に盛り込む。楽しいという実感が短時間であっても、また週1度という間隔であっても言葉を発すること、日常、英語という言語の音、文字などを楽しむ動機付けを活動目標とすると、例えば、年長、年中の保育室共有部分のなかよしコーナーに英語活動の内容に準じ、各季節のテーマに沿った wall-decoration や工作コーナーの設定などによってまだまだ、改良途上だが、園児に強制ではない遊びの中に取り入れられる要素を発見している。園児がある時期に熱中する手遊びに、今後は英語手話やベビーサインの導入を検討している。また、月1回園より発行される園便りに積極的に活動内容や、英語講師からの伝達事項を加え

ていく。掲示板への英語活動の内容掲示なども新たに試みの一つとしている。

第3：カリキュラム、英語活動の内容の選択、限定された時間内活動の要素

合科的な内容の選択の強化：

コミュニケーションの基本は、greetingであるのだが、挨拶の基本は大きな声でなくても相手に伝わるように考える良いチャンスであろう。大きく元気に、といって叫ばせるよりは、お友達に聞こえるように、お友達のお耳が痛くないようにと声の強弱に関しては、保育者の日本語によるフォローが非常に参考になる。英語を通すだけでなく、適宜の母国語を説明に加えることは、Team-teachingの形態を取っているからこそ可能なことであろうが、特に、保育者の園児に対する説明の適宜性に関しては真似ることはできない領域だと思っている。即答の技術に関して同様のことがいえよう。日常、年齢に応じた対応をしている保育者ならではの技術であろう。自身、育児の経験があるのだが、今思うと年齢に応じた言葉の選択ができていたかは定かではない。表現の仕方、副詞、形容詞の使い方、動詞の説明など参考になることが非常に多い。

さて、園児の興味は、日常、園庭にいるみみず、だんごむし、こおろぎ、ちょう、ありなどの生き物に注がれる。勿論、苦手な園児も少なくはないが、活動に取り上げる動植物、昆虫などの生き物に対する興味は個々にその深さに違いはあるものはずすことのできないテーマである。また、排泄物に対しては、実際口に入れる食べ物よりも、興味を引くようである。学習者自身の意味を考えると知りたい日常の疑問から未知なる物への疑問を育むことが、前述の〈もっと知りたい、もっともっと…〉の自主性を育てることは間違いあるまい。

前述の通り、年長年中共に、園の年間行事に沿って予め年間32回ほどの活動のほとんどを月曜日に、残りは水曜日、木曜日に20分、15分実施している。今回は、園行事と保育内容に沿うよう実施されている活動を一部紹介しよう。

年長クラス・あお・みどり2クラス—friendshipをテーマに一宿泊保育

宿泊保育の運営と実践についての報告書を紀要に執筆した幼稚園の通称〈お泊り保育〉（園児には冒険旅行との定義付け）は全保育者がかなりの時間と綿密な計画によって実施する園の大きな行事の一つである。偶然にも今年は、初日、次の朝という短時間ではあったが参加させていただいた。園外宿泊保育までの、園児の体験への不安と期待感の育成、保護者への安心と信頼のための説明会、宿泊保育前後は日常保育に加えられる様々な経過がある。行事が生活に〈節目〉を付け、保育に躍動感が生まれるとは、その紀要の中での保育者の表現であるが、行事がその園児にとっての良い〈チャンス〉となり、個々人の特性がはっきりと見え、またその特性が生かされ、また新たな面を育てる。不安と期待と意欲、失敗と達成、ルールと自主性など全ての生活の根幹ともいえる、行事が保育の中で突出しないように保育者先導型保育にならないように心がけられている。家庭との遊離をしないように保護者へ家庭での宿泊保育のための園児へのアプローチ、理解、協力体制の充実にも力を入れられている様子である。その宿泊

保育の目標でもある友情，園児同士の sharing を英語の中に導入してみる試みである。前任のアレン教授が Treasure-hunting とテーマにした授業を参考に動詞の導入・感情の表現を英語活動のターゲットとし，英字新聞を広げた形の地図を作り，生活グループの数だけ島を作り，そこで出されたクイズに答え，様々な色のついた鍵を手に入れていく。鍵にはメッセージがついていて，それぞれ Courage 勇気，Power 元気，Kindness 優しさ…などの宿泊保育のテーマに重ねていく。各クラスに週ごとに保育室の壁に〈鍵とメッセージ〉を子供たちの目に触れる場所に飾ってもらう。活動と活動の間の1週間のつながりを視覚的に残していくことに努めるわけである。また，英語活動以外でも保育中に導入に立ち合う機会を模索するなどである。

幼児の幼稚園生活の自然の流れの中で生活に変化や潤いを与える，主体的に楽しく活動できるようにすることを行事の意義とし，それぞれの行事についてはその教育的価値を十分に検討し適切なものを精選し負担とならないよう心がけると定義されている。適切かつ負担とならぬもの，つまり月齢などの個体差の大きなこの時期，負担にならないという観点から行事を導入し実践していくことがかなりの努力を要することは，容易に理解できよう。あらゆるアプローチによって保育者は園児の心や身体を各行事に向けさせていく時期に，やはり言語活動の一端を，と考える講師にとってもこういった機会は重要な意味合いを持つことにもなろう。あらゆる活動を一点にフォーカスすることには多少の無理も生じるであろうが，やはり，どんなターゲットであっても，期待と不安等の交錯する状況下，〈こころ〉をこれからの活動に無理なく向かせることが，〈身体〉を向かせることを意味するであろう。主体性を持つ，活動意欲を持つことが思わぬ発見を生み出すということであろう。

本論に戻ることにしよう。遊びの要素が大きいこの Treasure-hunting の activity は当然のことながら英語活動の問題点も提示せざるをえない。楽しいという気持ちをいかに保ちながら全員の気持ちを活動に向けさせるか？ グループ活動の際，順番を待つ際の活動をいかに分け，双方の気持ちや身体を正面に向けさせていくか，課題と感じられる点を保育者の意見を参考にしながら模索の状態である。当然，2クラスの間に進度の差，問題点の相違性，或いは空間による活動の限定などが持ち上がってくるわけだが，クラスによって形態や進度にこだわりを持たず，何回かの活動のゴールがある程度近くなることを目標に活動に柔軟性を持たせることで，ある程度の均一性は保たれる結果を得られた。2クラスで差が出てしまうことに神経質になるあまり，進度に不自然さや，学習者に負担を掛けていくことは避けるべき重要素であろう。また，グループ活動とはいえ，個々人で動く作業も多い。先に達成した学習者に，どうしても時間を要する学習者のお手伝いを要請すること，力を合わせて do something together という形を英語講師や保育者が強調することで，学習者である園児が20分の活動中に2グループ活動の活動当事者になれない場合，声掛けや既習の歌によって参加の形を取る。順番を待つというルール，自分以外の人間が何かをしている時に〈自分だったら…どうかな？〉と立場を置き換えて考えるという体験を意識的にしていく，既習事項を思い出してみようということを英語で体験する。小学校教育との連携，小学校以降の生活や学習の基盤の育成につながる期間に当たるこ

の時期に、合科的な内容の導入を自然な流れで行うことの難しさは否めないが、発達に応じ、その年齢なりに解決方法を探る経験を多く持つことで疑問を持ち、問題を見出し、更には解決する力を育てる。生きる力の育成という大きな括りでの活動を英語でも試みていくということであろうか？

1枚の英字新聞の地図が園児の内で世界を与える。本当のチャレンジャーになって真剣に保育室をジャングル等に見立て、宝探しを試みる。文字習得の途上であるこの時期に耳にした言葉や視覚的なものによって刺激を受け、創造性を持って活動に向かう。もっと言葉を知りたい、知っている言葉を使いたい、自分自身の言葉で話をしたいという communication への意欲を育てる、つまりはそれぞれが、自分自身を表現し、それぞれの生活において自分以外の人間との関わり合いを介して道を歩むための手段の一つとなる言葉への興味を育む基盤を築き始めるスタート地点がこの時期に当たっていることは間違いないであろう。

さて、ここで、現在の幼稚園でのカリキュラムを添付する。

年少クラス：2005年度年少組年間計画表を参考に

9月13日：第1回目；顔合わせ：例年10月開始の年少クラスだが本年度は試行のため

Theme：Hello! everyone. -Greeting 挨拶

3クラスのため①りす組9：40—9：50 ②ことり組9：55—10：05 ③うさぎ組11：00—11：10（園児の待つ時間への考慮により保育者からの申し入れがあり、3番目のクラスは他の保育活動が一段落した時間との想定にある）

Hello song を Potable CD で流しホワイトボードを運びながら入室、保育者はそれぞれのスタンスで園児に朝の集まりの際いつもとは違う活動があることを伝達済みのため保育者の考えにより保育室内のどの箇所にもどの様な隊形で集合するかを決めており、入り口からはやや遠目の位置にゴザを敷き、座らせている。男女はバラバラの状態だが担任保育者ないしアシストをする保育者は、心配な要素を持つ園児の近くに位置している。英語講師自身の自己紹介後は一人の保育者がホワイトボード前に講師と共に立ち、Team-teaching の形になる。挨拶や天気導入後は、その保育者が園児の先導役として一斉に repeat を促したり、号令を掛けたりしている。パッペットを使用し、講師とパッペット間で挨拶のモデリングを示す（講師は一人二役）。保育者は必要と思われる日本語を適宜に入れていく（これに関しての事前の話し合いはせず、保育者に委任の形態）。挨拶を中心に真似をしていく活動なのか、或いは question・answer の活動なのかを指示（その際は、モデリングを講師と前に立っている保育者で行う）。この際の指示語ははっきりと何度も繰り返すことで、或いは指示語を出すことでパターンを認識できるようにモデリングを繰り返し、保育者が園児側のリーダー役であることを示す。本年度の Team-teaching の形を取る保育者の先生方は既に年中年長での Team-teaching の経験者のため、かなり講師が必要と思われる箇所に適宜の日本語ないし gesture を自主的に導入、また、注意の必要な園児に対してのフォローがなされ、非常に円滑に活動が進んだ感がある。特に、先導役としての役割は非常に高く評価されると感じる。また、色つきの ABC chart を

使用しての初めてのABC songもゆっくりはっきり Read them aloud の形を1度取り、2回目にきらきら星の旋律でABC songを歌う際にも1度、園児は軽く聞いている形を取り、次に一緒に歌ってみる。曖昧ながら、耳にしたことのある旋律は、それぞれの文字の未習得段階においても声を合わせてみようとする気持ちにさせる。特にLMNOPの箇所は、ゆっくりと何度も繰り返すことで聞き分け、言い分けを励行させていくことである。次にTPR。Listen and act では、UP/DOWN/STAND UP/SIT DOWN/ JUMP UP/STOP/DANCEなどの動きの体験・指示はしていないのだが、中には自主的に鸚鵡返しにUP/DOWNと繰り返す園児もいる。最後にSTRETCH YOUR BODYで終わる。挨拶の仕方をまたモデリングの形を取り、終了し、See you next time! といいつつ退出する。さて、昨年例ではあるが、年少クラスにおいてABC songを英語活動の始まる前に自らピアノの速度を変え、聞き分けや、言い分けの困難なLMNOPの箇所を練習する様子聞き、英語活動へのこころと身体の動機付けを行ったクラスはかなりの定着を見た。10分の英語活動以前の時間でwarm-upができたことに結果としてなっており、本当に円滑にThemeを導入できたことは好例といえよう。

年少組年間計画表を参考に

10月：第2回：Theme：Halloween：trick or treating -quiz

Number-counting と Guessing-game を中心に

TPR：review と新しい動詞/運動会に連動させ、run/march/walk/dance/touchなどを導入

STORY-TELLING：Halloweenの日の魔法使い一家のオリジナルストーリー

11月：第3回/第4回：Theme：園行事・一日動物村にフォーカスして：Animals

人間のからだ・動物のからだ/Body parts

Quiz：What's this?

TPR：review と touch your… (Body parts)

BOOK-READING <Abracadabra 1 2 3>

SONG：Head, shoulders, knees and toes

12月：第5回：Theme：Christmas：贈り物

Santa Claus and Christmas tree：colors and numbers and shapes

TPR：review count 1 2 3/open your hands/ shut your hands

BOOK-READING <Ho! Ho! Ho!>

SONG：We wish you a Merry Christmas

1月：第6回：Theme：Family and I：家族と自分

Quiz：Who am I?

Family tree/Papa Mama Brother sister Baby and I

TPR：review

STORY-TELLING：

SONG : 1 2 3 4 5

2月：第7回：Theme：Happy birthday to you!：お誕生日会

STORY-TELLING：HAPPY BIRTHDAY TO ME?

TPR：review blow/clap your hands /say…

SONG：HAPPY BIRTHDAY TO YOU!

GAME：LISTEN AND ACT

3月：第8回：Theme：Thank you/ You're welcome：年中クラスとの関わり

Let's say it aloud!

BOOK-READING：THANK YOU!

SONG：I have a joy.

行事・健康（生活習慣・遊び・体操）人間関係・環境・言葉・表現（制作・うた・手遊び）にまたがる年間計画表の中で英語を介し可能な活動を選択しているのだが、年少クラスの園児の中には第一回の英語活動以来講師を見かけると近付き、Hello! Good morning! と声を掛けに来る積極性を持った園児も多数見受けられる。また、保育者の中には、〈ほーら！Mrs. Ueno よ〉と園児に声掛けをし、講師との接点を持ちやすく心がけをしてくれる。その度に英語のみで接することを講師側が心がけながらも、園児の声を拾いながら、適宜に日本語を使うことで、園児との距離はどんどん縮まっていく感を持つ。〈これなあに？〉と手を引っ張りジャングルジムを指差し英語を求める園児もいれば、だんご虫やありなど、園庭で捕まえた昆虫や生き物、拾い集めた葉や実を見せに来てくれる園児は、〈日本語、分からないかなー？〉と聞こえるようつぶやき、〈ミミズ？ ドングリ？〉などと英語らしく聞こえるように告げる。そこですかさず、〈It's an earthworm. They're acorns.〉と畳み掛けると、鸚鵡返しのように器用に真似をする。とにかく、徹底して英語によるインプットを現在は試みている段階である。英語活動の時間外での園児との接点は積極的に、園内外で試みている。お弁当の時間に一緒に給食を囲む、〈Do you like this? I love it, It's yummy!〉と声を掛ける。こども図書館で絵本の読み聞かせをしたり、本棚に英語の絵本やカセット CD を配し、季節や、Theme に合わせた英語の本を置く。活動に使用した絵本を保育室に配する、遊具の中に alphabet blocks や English games を加える。飼育中の生き物の飼育箱に英語を配する、などできうる限り英語が自然に視覚の中に入るようどんどん加えていく努力をしている。園児の中には、〈これなんて読むの？ これは？ これは？〉等と質問を重ねる子もいる。そんな質問には精力的に答える。どろだんごの作り方を教えてもらう。なわとびの counting をする。何でも参加する。園児の視点がどこにあるのかを、探りながら、日常の好奇心、興味の対象を把握していくことで、英語を介して何が可能か？ を突き詰めていくのである。

英語活動の時間は限定されてはいるが、限定された時間の中で何にフォーカスすべきかが絞れるようになったのは、日常に関われる機会を得られたからであることに間違いがないと思う。年中年長の年間カリキュラムについても同じことがいえよう。しかし、年中で取り扱った

Theme を年長で更に深くするという試みを本年度から本格的にしている。年中で活動に軽く取り入れた内容を復習を兼ね、年長で扱う。BOOK-READING に関しては、同じ Theme を扱い、違った内容の絵本を読み込んでいく。適当な絵本が見つからない場合は、オリジナルを紙芝居などの形で作っていき、Quiz などを盛り込み、参加型の形態を取っていく。或いは、絵本の内容から発展させ、園児たちとオリジナルのお話を作っていく、といった展開を試みている。Big book や通常サイズの絵本、紙芝居、パッペット、飼育している生き物、園庭の植物、保育室の中の遊具など教材はつきないが、いかに教材教具を効果的に使っていか、活動時間を有効に使うかは、難しい。しかしながら、知りたい意欲を湧かせることに焦点を絞り、糸口を見つける何かを感じさせることを心がけていくことで、実を結ぶ〈楽しい気持ち〉〈ワクワクする気持ち〉を時間を掛けて育むことができるのがこの時期であるように思う。園児と共に考える手遊び歌などは、Children-centered activity として大いに活用できるだろう。

第4：保育内容との連動

最後に保育との連動として保育者からの提案ではっきりと英語の導入が形になった例を掲げよう。当園でのこども劇場では、近年、年長の英語の歌が発表されてきた。2曲、英語活動の中で導入された曲を歌う形で継続されてきた。昨年は文字と音を取り入れた ABC song と、世界のこんにはを紹介する Hello to the children of the world であった。

ドキドキの舞台で大きな声で歌えた2曲であったが、特筆すべきは、園の保育者と園児が考えるオリジナルオペレッタの中でチャレンジした〈ひとりひとりホールに見えるものをその場で英語でいってみよう！〉〈I see…〉の場面であった。勿論、リハーサルが行われているが、リハーサルの時に練習した言葉を暗記するのではなく、手にしたお手製の双眼鏡を覗きこみ、前後上下左右を見回した上、今見えたものをその場で一人一人いっていく。本当に双眼鏡を覗きこみ、考えてその場でマイクを使用するというのである。時間を掛け、周りをジッと観察し、考えて小さな声で答えていく園児もいれば、順番が回ってくるまでクルクルあたりを見渡し、考えていたものを直前の園児にいわれてしまい、そわそわし始める園児も、天井を見上げ、アッとランプを見つけ、I see a lamp. と大きな声で答える。講師自身も何だかドキドキの一瞬を共有する。I see a shoes. なんていう間違いもある。が、そんなことは大人の学習者でさえある間違いである。とにかく、楽しいドキドキとワクワク、自分の力でいえた時の達成感、保育者が、英語活動の中から園児に可能な活動を取り入れる、園児がそれを楽しむ、これこそが、良い循環を生み出していくように感じる。

園では、こども劇場を数日間に分け、開催し、その後は、学年を超え、その体験ができるよう、衣装や小道具を設置している。年長が年中のオペレッタを模倣し遊ぶこともあれば年中や年少が年長の園児に手ほどきを受けて遊ぶこともある。驚くべきは、年長の I see… の真似をし、年中や年少が遊びの中に英語を取り入れていたことである。ある種のピアラーニングが行

われているのである。英語活動と保育内容との連動は今や、時間をかけ、ところをかけた前任講師の蒔いた種が芽を出し、そして茎を伸ばし始めていることに疑う余地はない。今後は、その茎に青々とした葉が出、蕾をつけ、花を咲かせ、実を結び、その実が新たな種を生み出せるように水を与え、その土に肥料を加えなければなるまい。

第5：言語への興味、発達と英語活動の関係性

園内では、年長クラス〇〇ちゃんは、非常に活発である。語彙数も他の園児に比してかなり多い。身長も高く、運動能力も垣間見る限り、高そうである。例を挙げれば縄跳びの回数や、走る姿は、小学生のようである。年少、年中と継続的に観察する限り彼女の会話力は大人顔負けの感もある。ただ、非常に幼い部分もあり、細かなことにこだわって、涙を流す姿にはこんな面が残っていて良かったなどとちょっとほっとする気持ちも否めない。Themeにもよるが、英語活動の中、彼女の発言は良くも悪くも影響力を持つ。反応の速さのみならず、言葉の多さは、群をぬいているのではなからうか？言葉の運用能力は、文章が、単文ではなく、複文であり、巧みに接続詞を使用し長い文章を話し、理路整然としている。彼女は、英語においてもその積極性を失うことはない。当然、英語に対し英語で答えるばかりではなく、英語の質問に日本語を駆使し答える場面も多々ある。偶然、園外で母親と一緒に〇〇ちゃんに会った際、矢継ぎ早に質問をされた、道すがら、彼女の質問の速度と内容に驚かされた。言葉を巧みに運用する〇〇ちゃんは質問が得意のようである。宿泊保育で接点の多かった〇〇くんも同様に、接続詞を巧みに操り、まるで大人の会話を連想させるようである。彼は、英語活動の際、真っ先に質問に答えるために挙手をする。ジェスチャーのとても大きな〇〇くんは、細身の好奇心一杯の園児だが、彼の活動参加の形態は、常に質問に関する沢山の情報をシェアしてくれる。大きな声で全員に聞こえるように話す彼を見ていると、やはり、言葉そのものに興味を持つ園児は、取得した言葉の運用にも興味を持ち、当然、運用することによって習得していくように思う。新聞で作った剣を振りかざして他の園児と戦いごっこをしている際も非常に饒舌である。

きちんとしたデータを持って仮定しているわけではないのだが、やはり、母国語の言葉数の多い（流れるように、同じ言葉を羅列し、会話を埋める現象も含め、或いは、単に語彙数の多い）園児は、英語活動での参加においても、いかなる形にせよ積極的であるように思う。

第6：今後の課題

Team-teachingは保育者からの気付き、協力があって、徐々に良い方向に向いてきている感は強い。今後は、時間をかけ、その年度にあったTeam-teachingのより良い方向性を模索していくことになるであろう。

また、近年、文京学院大学、短大キャンパスに米国2大学、マレーシア1大学からの交換留学生が4ヶ月にわたって滞在している。昨年度は数度にわたり有志が幼稚園の英語活動HALLOWEENのHAUNTED HOUSEの活動、また、国際交流会館をTRICK OR TREATING

の会場として使用し、実際に参加をしてくれている。また、引率教授のご協力もあり、本年度は既に2度ご好意で訪園され、園児たちとの英語活動に参加してくださっている。10歳の女の子の英語に耳を傾け、姿を追い、臆することなく〈どんなお花が好きですか？ 何色の花が一番好きですか？〉〈アメリカのおうちでは何の遊びが好きですか？〉〈泳げますか？〉などの質問の答えを求める園児のキラキラした瞳は、彼らの今後の英語活動への原動力の要素になるに違いない。今後は、相互でシェアリングできる活動に参加をお願いし一方通行ではない形にできるようしっかりプログラミングし、正式に参加していただけるようお願いしたいと考えている。

また、保育者の先生方との研修についても、少しずつ形態や内容の吟味をしていくことで、前述の Team-teaching の方向性を定めていくことにもなろう。

おわりに

前述の事項を繰り返すことになるが、平成9年度には人間学部の紀要に〈英語教育の変遷と試み〉と題し、そして11年度には、〈保護者の英語教育に関する意識調査〉13年度には文京学院大学の紀要に〈より良い英語教育に向けての取り組み〉を園はアレン玉井光江教授の下、研究を継続し、日常の保育と同時進行の形で意識的な努力をしてきた。平成9年度からの月1回の保育者研修の継続も多忙を極める保育者と同様に英語講師の時間を意識的に英語のために持つ工夫は、その大きな意義のみならず、実際の保育者の〈こころと身体〉を英語活動に向けるという深い形を残している。保育者がプライベートで英語圏に旅行に出かけ、自分のクラスの園児へと英語の絵本を手にし求める。こんな絵本を見つけました…とその絵本を手にした保育者の表情を見た時にごく自然に保育に英語は入って来ているのだと胸が熱くなったことを覚えている。また、今年の担当保育者の先生が同じ様な表情をして、英語の絵本を見せてくれた。強い信頼関係で結ばれている園児と保育者、保育者が真っ直ぐ、英語と向き合っている実感は、園児たちの英語への取り組みに比例している。保育者も英語活動に新しい気付きを見出せるよう、3年間にわたる園の英語活動を長いスパンで捉え、実際の年間、週間、日案を検討改良し、骨組みを整えることは、急務であろう。この17年度までに既に4年という年月が経過しようとしている。幼稚園を取り巻く環境のみならず、全てにわたり、日本を含む世界が変わってきている。その変化に動じてはいけない、その変化の速度に焦りを覚えてはいけない。Pleasure-learning, Slow-learning, 全ての学びに共通する学習形態を学習者に合わせ、さらには、合科性を持たせることで日常生活に深く関わった内容を段階を持って扱うことが可能になろう。

就学以前に蓄積されるもの。いま、それを保育期に限定して定義するならば、これから体験していくことに、物に、人に、〈こころと身体〉を真っ直ぐに向ける方法の習得、日常から未知なるものへの興味を主体性を保ちつつ、継続して持つ意思ではなかろうか？ 全てが始まるこの時期に英語という言葉を紹介してできること、それは、知らないことを知りたいと思う気持ちの育み、日常からは少し離れた所に存在しているものへの自主的なチャレンジ、新たなこと

に対する豊かな創造性を創るということではなかろうか？

参考文献

Come educare il potenziale umano, Maria Montessori, Ediziano Garanti MI 1992

Educazione per un Mondo nuovo, Maria Montessori, Ediziano Garanti MI 1992

幼児教育と脳：澤口俊之 文芸春秋 2002

言語の脳科学：酒井邦嘉 中公新書 2002

幼稚園教育要領

学校教育法施行規則（抄）

学校教育法（抄）

幼稚園教育要領解説：文部科学省

文京学院大学総合研究所紀要